

# 鑑賞活動におけるパフォーマンス評価の開発

## Development of a Performance Assessment for Music Appreciation

根津 知佳子\* 川見 夕貴\*\* 日下 瑤子\*\*\*  
Chikako NEZU Yuki KAWAMI Yoko KUSAKA

**要約** 本研究の目的は、小学校中学年レベルの鑑賞活動におけるパフォーマンス評価を開発することである。この段階では、音楽的認知における“図と地の分化”に関するつまずきが多いことが課題となっているからである。パフォーマンス評価とは、何らかの課題や活動を実際に遂行することにより評価するものである。本研究では、パフォーマンス課題とルーブリック（評価規準）の2つの開発が必要であったため、実演による鑑賞活動におけるパフォーマンス課題と、学習指導要領に基づくルーブリックおよび音楽的認知を軸とした2つのルーブリックを作成した。後者のルーブリックの作成にあたり、梅本(1996)とLeBlanc(1985)を援用した。試行の結果、開発したルーブリックは、学習レディネスをチェックするために有効であることが示唆された。

**キーワード**：パフォーマンス評価、ルーブリック、音楽的認知、図と地、鑑賞

**Abstract** The purpose of this study was to develop a performance assessment for music appreciation for third and fourth grade students in elementary school. This is because students often stumble with the differentiation of “figure and ground” in musical cognition at this stage. Performance assessment is used to conduct evaluations based on the actual performance of a task or activity. Therefore, this study had to develop two things: a performance task, and a rubric (evaluation criteria). This study created two rubrics: one based on performance tasks in music appreciation of actual performances as well as on a course of study, and one focused on musical cognition. The work of Umemoto (1996) and LeBlanc (1985) was used to create the latter. Results of trial use suggested that the developed rubrics were effective in checking learning readiness.

**Key words** : performance assessment, rubric, musical cognition, figure and ground, music appreciation

### 1. はじめに

乳幼児期から幼年期にかけての移行の在り方や連携の在り方とは質の異なる課題が小学校の低学年から中学年の段階に内在する。この時期には、メロディと伴奏の理解に代表される「図と地の理解」が

基盤となって音楽的経験が拡張する。そのため、この段階の“音楽的認知”に関する「つまずき」は、音楽科教育における重要課題となっている。

例えば、学習指導要領では、表現及び鑑賞のすべての活動において共通に指導する内容として、[共通事項]が重視され、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みや働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ることが重視されている。

旧学習指導要領 [共通事項] に関する学年の系統性をまとめたものが Table 1 である<sup>1)</sup>。Table 1 は、小学校中学年（3・4年生）から「音の重なり」「変

\* 人間生活学研究科  
Graduate School of Human Science and Design  
\*\* 学術研究員  
Academic Research Fellow  
\*\*\* 国立音楽大学大学院音楽研究科博士後期課程  
Kunitachi College of Music Postgraduate School of Music

Table 1 Common Items<sup>2)</sup>

共通事項	1年	2年	3年	4年	5年	6年
音色	楽器の音色・声の出し方	声のおもしろさ	金管楽器	木管楽器・打楽器の材質	弦楽器・声の特徴	オーケストラ
強弱	強弱に合わせた手拍子	強弱に注目した鑑賞	競争の変化と強弱	表現(旋律の特徴)	表現(歌詞の内容)	表現(パートの役割)
拍の流れ	拍の流れ	2拍子・3拍子の流れ	4/4 3/4 2/4 の拍子感	6/8の拍子感	拍の流れの変化	拍の違い・拍子感
速度	速度の違い(わらべうた)	速度の違い(歌詞の内容)	速度の違い(鑑賞)	速度の変化(鑑賞)	速度の変化と楽曲のよさ	速度を生かした表現
リズム	簡単なリズム	2拍子・3拍子	器楽合奏	旋律や伴奏のリズム	リズムの組み合わせ	リズムの重ね方
旋律	音の高さの違い	音の高さの違い	曲の山	スタッカートやレガート	言葉と旋律の結びつき	語感を生かした表現
フレーズ	リズムのまとまり	旋律やリズムのまとまり	リズムのまとまり	歌詞のまとまり	歌詞のまとまり	歌詞のまとまり
音階や調			ハ長調・日本の音階	ハ長調・日本の音階	ハ長調やイ短調	+日本の音階
音の重なり			<b>音の重なりや重ね方</b>	<b>歌声や旋律の重なり</b>	パートの重ね方	声や音の重なりあう響き
和声の響き					ハ長調の和音の移り変わり	イ短調の和音と移り変わり
音楽の縦と横の関係					旋律やパートの重なり方の違い	旋律やパートの重なり方の違い
反復	ことばあそび	反復を用いたリズム遊び	反復を用いた音楽づくり	反復を用いた音楽づくり	反復を生かした音楽づくり	旋律や言葉の繰り返し
問いと答え	リズム遊び	リズムの組み合わせ	問いと答え	合いの手(民謡)	問いと答え	問いと答え
変化			曲想の変化への注目	曲想の変化への注目	曲想の変化を生かす	曲想の変化を味わう

Table 2 Order of Subjects<sup>4)</sup>

1年	2年	3年	4年	5年	6年	中学生(例)
拍を感じて遊ぼう	拍のまとまりを感じ取ろう					
		拍の流れに乗ってリズムを感じ取ろう	拍の流れに乗ってリズムを感じ取ろう			速度や強弱の変化を生かした表現の工夫
拍を感じてリズムを打とう	拍子を感じてリズムを打とう			曲想を味わおう	曲想を味わおう	曲想の変化の享受
ドレミで歌ったり吹いたりしよう	音の高さの違いを感じ取ろう		旋律の特徴を感じ取ろう			
		旋律の特徴を感じ取ろう				
様子を思い浮かべよう	様子を思い浮かべよう		旋律の重なりを感じ取ろう	和音の美しさを感じ取ろう	和音の美しさを感じ取ろう	パートの役割や旋律の重なり方の違いの享受
いろいろな音を楽しもう	いろいろな音を楽しもう	いろいろな音の響きを感じ取ろう	いろいろな音の響きを感じ取ろう	いろいろな音の響きを味わおう	いろいろな音の響きを味わおう	日本の伝統音楽世界の民族音楽

化)「音階や調」などの学習(太字下線部分)が始まること、それが高学年(5・6年生)の「音の重なり」「和声の響き」「音楽の縦と横の関係」の学習(灰色部分)の基盤になっていることを示している。

では、具体的な活動はどのように拡大するのだろうか。中学校への移行も含めた小学校全学年の題材の系統性についてまとめたものがTable 2である<sup>3)</sup>。Table 2からも、小学校中学年の学習は、高学年から中学校への移行の基盤になっていることが明らかである。

ところで、小学校中学年における鑑賞においては、

「ア. 鑑賞についての知識を得たり、生かしたりしながら、曲や演奏のよさなどを見だし、曲全体を味わって聴くこと」「イ. 曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて気づくことを身につける」ことが目標となる。旧学習指導要領で重視された「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさに気づくこと」は、前述のAに含み入れられる形態で改訂されている。いずれにしても、音楽鑑賞を通して、Aとイの事項を「身に付けることができるよう指導する」ことが求められる。

Table 3 Musical Hierarchy<sup>6)</sup>

音楽の次元	認知される属性	発動される心理作用	認知される単位
音響としての音楽	音の高さ・大きさ・音色・長さ	弁別・同定 <b>感覚</b>	単一の音
知覚の対象としての音楽	旋律・リズム・和声	パターン認識・類似性判断・階名による音の符号化 <b>知覚</b>	音の輪郭パターン・音の塊り
構造を持つものとしての音楽	曲の主題とその発展	類似性および関係性を認知して分析することによる構造の理解	楽句・楽節
意味および内容を持つものとしての音楽	曲の標題・筋書・思想	認知・共感的理解	曲全体



Photo 1 Appreciation via Performances

前述したように、小学校中学年の“音楽的認知”に関する課題、つまり音楽学習の「つまずき」に関する支援方法の開発は喫緊の課題と言える。この課題の解決にあたり、梅本（1996）の4つの階層構造（音響・知覚・構造・象徴）におけるすべての“音楽的認知”によって完全な“音楽的認知”になる<sup>5)</sup>とする言説は示唆に富んでいる。

Table 1, 2 で確認したように、小学校中学年レベルの音楽学習は、Table 3 の「知覚の対象としての音楽」から「構造を持つものとしての音楽」への移行段階に相当すると考えることができる。この学習のためには、以下の2つの“音楽的認知”が求められる<sup>7)</sup>。

1. 時系列方向での楽音の群化
  - ①時間的隣接性に基づく群化
  - ②類同性に基づく群化
2. 垂直方向での楽音の群化
  - ①音色の類同による群化
  - ②空間的な近接性

梅本による音楽階層の特徴は、「発動される心理

的作用」という観点を設定していることと、すべての音楽的認知がそろうことを強調している点である。そこで本稿では、“カクテルパーティ効果”に課題がある対象者、つまり音の選択的注意が困難である対象者の合理的配慮も視野に入れたパフォーマンス評価（パフォーマンス課題と評価規準の作成）を開発することを目的とする。

## 2. パフォーマンス評価の開発

Performance Assessment（以下、パフォーマンス評価とする）とは、何らかの課題や活動を実際に遂行することにより評価するものである。

根津（2018）は、横山・小島（2012）寺園（2001）小山（2013）薄田・原田（2013）薄田（2014）などの音楽科のパフォーマンス評価に関する先行研究を検討した上で<sup>8)</sup>、非言語活動に焦点を当てたパフォーマンス課題（合奏）を開発した<sup>9)</sup>。また、言語活動に焦点を当てた鑑賞を対象とした先行研究が多いことを指摘し、その背景には、数学や理科におけるパフォーマンス評価が児童・生徒の思考のプロセス

や学力の状態を把握する目的で実施されていることを指摘した。

元来、パフォーマンス評価は、演奏・演技・できばえの意味に近く、リアリティのある場面で知識・技能を用いながら行われる実演や、その成果物を通して評価するということを重視することから、本研究では、根津ら(2016)<sup>10)</sup>および根津(2018)<sup>11)</sup>の研究の一環として、実演による鑑賞場面のループリック(評価基準)を作成する。

以下、パフォーマンス課題遂行(日下)、学習指導要領を基にしたループリック(川見)および音楽的認知を軸としたループリック(根津)の開発プロセスを報告する<sup>12)</sup>。

課題：サンサース作曲『動物の謝肉祭』の鑑賞活動(課題1～3)

楽曲：『序奏とライオンの王の行進』『めんどりとおんどり』『かめ』(『天国と地獄』)

『水族館』『鳥かご』『化石』(『きらきらぼし』、『死の舞踏』)『白鳥』『終曲』

演奏形態：3名(サクセス・ピアノ・打楽器)による生演奏および映像視覚<sup>12)</sup>

参加者：『音楽の森7』の参加者35名(支援が必要な対象者を含む)

実施日時：2019年3月11日(土)14:30~16:00

場所：日本女子大学目白キャンパス百年館低層棟301教室

『動物の謝肉祭』に関するパフォーマンス課題は、以下の3種である。

パフォーマンス課題1：アンサンブル(サクセス・打楽器・ピアノ)の演奏を鑑賞し、音楽的な「図と地」を理解する。

＜対象楽曲＞サンサース作曲：組曲『動物の謝肉祭』より『白鳥』

パフォーマンス課題2：アンサンブルを鑑賞し、音楽的保存(メロディ・テンポ)を理解する。

＜対象楽曲＞『かめ』

パフォーマンス課題3：アンサンブルを鑑賞し、音楽的保存(意味レベル)を理解する。

＜対象楽曲＞『化石』

また、3つのパフォーマンス課題をそれぞれ梅本の音楽階層に依拠すると次のように分類することができる(Table 4. 最右列)。

本稿では、パフォーマンス課題1について報告する。

### 3. 学習指導要領に基づいたループリック

『白鳥』は音楽科教科書には鑑賞教材として掲載されている。教育芸術社の『小学校の音楽4』(4年生)では、「旋律の特徴を感じとろう」を題材名としている。また教育出版『音楽のおくりもの』では、題材名を「旋律と音色」とし、題材の目標等を「楽器の音色の特徴及び、旋律の反復や変化をとらえて聴く。旋律やフレーズの特徴をとらえて、曲想を生かした表現を工夫する」としている。そして、学習のねらいは、「せんりつの流れをきき取りながらチェロとピアノの音楽を楽しもう」である。教育出版社では、『白鳥』は昭和27年から平成12年までは4年生、平成14年以降は3年生の教科書に掲載されている。教科書教材としての『白鳥』は、小学校中学年で取り扱われており、旋律の特徴を感じとることが目指されている。学習指導要領に基づいた目標例

Table 4 Performance Tasks

音楽の次元	認知される属性	発動される心理作用	パフォーマンス課題
音響としての音楽	音の高さ・大きさ・音色・長さ		
知覚の対象としての音楽	旋律・リズム・和声	メロディと伴奏 ⇒白鳥	1
構造を持つものとしての音楽	曲の主題とその発展	メロディーの保存 ⇒かめ・化石	2・3
意味および内容を持つものとしての音楽	曲の標題・筋書・思想	象徴性の保存 ⇒かめ・化石	2・3

は、以下の通りである。

- (1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付くとともに、表したい音楽表現をするために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付けるようにする。〔知識及び技能〕
- (2) 音楽表現を考えて表現に対する思いや意図をもつことや、曲や演奏のよさなどを見いだしながら音楽を味わって聴くことができるようにする。〔思考力、判断力、表現力〕
- (3) 進んで音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う。〔学びに向かう力、人間性等〕

以上から、「引き出したい力」として、次の5点を評価の観点とした。

#### ①曲想と音楽の構造

曲想と音楽の構造の関わりに気づくことができる。

#### ②旋律の特徴

旋律の特徴を感じとり、他の楽曲の旋律との類似性に気づくことができる。また、類似した旋律に

おいて、その違いを感じ取ることができる。『化石』（『死の舞踏』、『きらきら星』）、『かめ』（『天国と地獄』）、『終曲』など

#### ③楽器の音色

多様な楽器の音色や響きの特徴を感じとり、その奏法との関わりに気づくことができる。

#### ④楽曲や演奏のよさ

『動物の謝肉祭』に関する知識を得、曲や演奏のよさなどを見いだし、音楽を味わって聴くことができる。

#### ⑤他者との共有

他者の音楽の感じ方やイメージに共感したり、自分の感じ方との違いに気づくことができる。

次に、A、B、Cの3段階の評価基準を設け、『白鳥』が教科書教材として用いられている小学校中学年程度のレベルを3段階の中間にあたるBに設定し、Aを小学校高学年程度、Cを小学校低学年程度のレベルとする。

「曲想と音楽の構造」、「旋律の特徴」、「楽器の音色」、「楽器や演奏のよさ」、「他者との共有」の5つの観点において、A、B、Cの3段階の評価基準を設けた。

Table 5 Rubric I

	曲想と音楽の構造	旋律の特徴	楽器の音色	楽曲や演奏のよさ	他者との共有
A	曲想及びその変化と音楽の構造の関わりについて理解することができる。	旋律の特徴を感じ取り、他の楽曲の旋律との類似性に気づくことができる。また、類似した旋律において、その違いを感じ取ることができる。	多様な楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わりを理解し、動物や情景をイメージすることができる。	楽曲に関する知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏のよさなどを見出し、音楽を味わって聴くことができる。	他者の音楽の感じ方やイメージに共感したり、自分の感じ方との違いに気づくことができる。
B	曲想及びその変化と音楽の構造の関わりについて気づくことができる。	旋律の特徴を感じ取り、他の楽曲の旋律との類似性に気づくことができる。	楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わりに気づき、動物や情景をイメージすることができる。	楽曲に関する知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏のよさなどを見出し、曲全体を味わって聴くことができる。	感じたことや気づいたことを伝え、他者と音楽を共有することができる。
C	曲想と音楽の構造との関わりについて気づくことができる。	旋律のまとまりを感じとり、他の楽曲の旋律との類似性を感じることができる。	楽器やその演奏の仕方に関心をもち、楽器の音色の特徴からイメージをもつことができる。	楽曲に関する知識を得、曲や演奏の楽しさを見出し、音楽を味わって聴くことができる。	他者と音楽を共有することができる。

#### 4. 音楽的認知を軸としたルーブリックの検討

LeBlanc(1987)は、音楽嗜好の決定要因について8つのレベルで説明している。

Fig.1は、個人の特性だけではなく「音楽（刺激の物理的特性・刺激の複雑さ・刺激の指示的意味・演奏の質）」「環境（仲間集団・家族・教育者と権威者・偶然的な条件付け）」そして、「メディア」が音楽の聴取に影響を与えることを意味するものである。特に、本研究が着目する段階の音楽学習に関する項目としては、「基礎的注意力（6）」「聴覚的感受性・音楽的能力・音楽的訓練・記憶（4）」「聴き手の脳による処理（3）」が重要な観点となる(灰色部分)。一方で、音楽学習や音楽認知に関するつまづきが見られる児童については、Fig.1(太字)の「聴取を可能とする生理的条件（7）」「その時の情緒状態（5）」も視野に入れることが重要になる。

本研究では、Table 6に示すように、実演による演奏鑑賞の観点として「立体的空間感覚(右から2列)」と、音楽学習を促進・支援する観点としての「映像理解(最右列)」も加え、6つの観点によるルーブリックを作成した。

#### 5. 考察

ここで、パフォーマンス課題におけるエピソード例について、ルーブリック I (Table 5) と II (Table

6) および Fig. 1 を用いて記述する。

【エピソード (川見)】

カホンの奏者が前に出て、演奏を見せるために再度、猫バスのリズムを叩いた。

①その時、Aさんを含め数人は、演奏者の手の動きではなく、顔を見ていた。

②演奏を聴いているとき、Bさんが貧乏ゆすりのように体を震わせていた。

③Cさんは、演奏中にメロディを口ずさんでいた。さらに、1人だけ手拍子をしていたり、曲のフレーズの隙間に「フォー」と掛け声を入れたりしていた。

エピソードの下線①「その時、Aさんを含め数人は、演奏者の手の動きではなく、顔を見ていた」という記述は、前述の目標3の「進んで音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う」の〔学びに向かう力、人間性等〕にかかる部分であり、対象者の鑑賞態度についての記述である。この記述から、参加者が実演による鑑賞場面に関心を示しているものの、何に注目したらよいかわからない状況であり、「基礎的中注意力 (Fig.1 レベル6)」に問題があることがわかる。また、下線②「演奏を聴いているとき、Bさんが貧乏ゆすりのように体を震

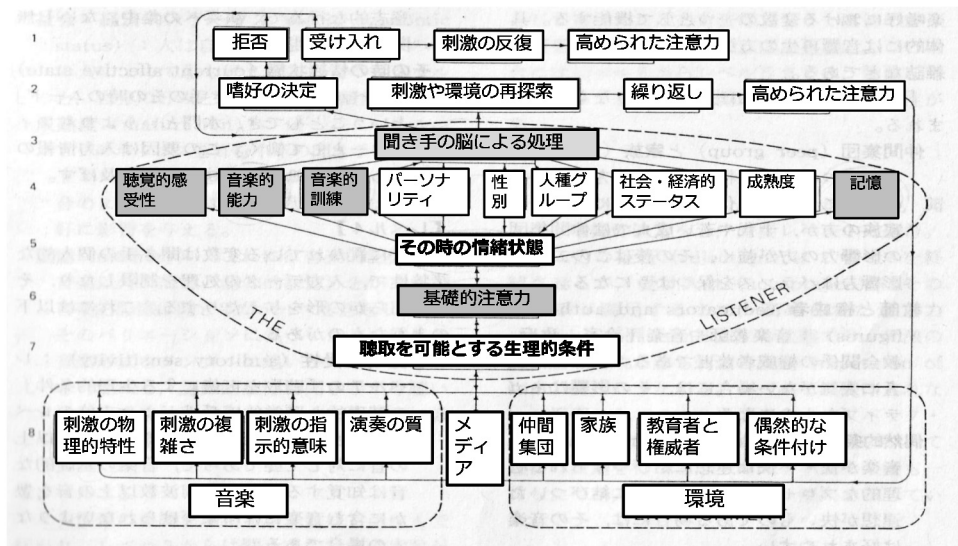


Fig. 1 Stages of Listening Music Preference



Table 6 Rubric II

	音響	知覚	構造	象徴	立体的空間感覚	映像理解
A	アンサンブルを味わって鑑賞することができる。	メロディーと伴奏の関係を理解し、言語化できる。	メロディーと伴奏のホモフォニックな関係を理解し、言語化できる。	標題音楽として理解し、言語化できる。	アンサンブルの全体像（形態）を理解しながら鑑賞することができる。	補助的な映像を基に、曲想を理解することができる。
B	アンサンブルを鑑賞することができる。	メロディーと伴奏の関係を理解できるが、言語化できない。	メロディーと伴奏のホモフォニックな関係を理解できるが、言語化できない。	独自のイメージで音楽を言語化することができる。	アンサンブルを理解し、鑑賞することができる。	補助的な映像と音楽を連結することが難しい。
C	アンサンブルを鑑賞することができない。	メロディーと伴奏の関係を理解できるが、言語化できない。	メロディーと伴奏のホモフォニックな関係を理解できない。	イメージすることができない。	アンサンブルを理解して鑑賞できない。	補助的な映像の理解ができない。

Table 7 Trial of Rubric

メロディーを認知することはできる。

	音響	知覚	構造	象徴	立体的空間感覚	映像理解
A	アンサンブルを味わって鑑賞することができる。	メロディーと伴奏の関係を理解し、言語化できる。	メロディーと伴奏のホモフォニックな関係を理解し、言語化できる。	標題音楽として理解し、言語化できる。	アンサンブルの全体像（形態）を理解しながら鑑賞することができる。	補助的な映像を基に、曲想を理解することができる。
B	アンサンブルを鑑賞することができる。	メロディーと伴奏の関係を理解できるが、言語化できない。	メロディーと伴奏のホモフォニックな関係を理解できるが、言語化できない。	独自のイメージで音楽を言語化することができる。	アンサンブルを理解し、鑑賞することができる。	補助的な映像と音楽を連結することが難しい。
C	アンサンブルを鑑賞することができない。	メロディーと伴奏の関係を理解できるが、言語化できない。	メロディーと伴奏のホモフォニックな関係を理解できない。	イメージすることができない。	アンサンブルを理解して鑑賞できない。	補助的な映像の理解ができない。

補助的な映像が鑑賞活動を阻害

わせていた」という記述は、Bさんの「聴取を可能とする生理的条件（レベル7）」や「その時の情緒状態（レベル5）」に問題があったのではないかと考える根拠となり得る。これはBさんの個別の問題であるのか、「音楽」「環境」「メディア」というレベル8

の項目に起因するものなのかを検討するための重要なポイントと考えることができる。

ところで、下線③「Cさんは、演奏中にメロディを口ずさんでいた。さらに、1人だけ手拍子をしていたり、曲のフレーズの隙間に「フォー」と掛け声

を入れたりしていた」の記述から、Cさんはパフォーマンス課題1で焦点を当てている「図と地の分化」に関しては、ループリックⅡにおいて「知覚A」と評価できる。しかし、演奏者の配置を含めたアンサンブルの全体像(形態)に関する「立体的空間感覚」については、イメージを膨らませるための支援としての映像(Photo1)への気づきや理解が難しいという課題があることがわかる。これは、一般的通説である特別支援教育における「視覚支援の有効性」に新たな一石と投じる課題であるといえよう。

一方で、「聴取を可能とする生理的条件(レベル7)」を整えることによって、「基礎的注意力(6)」の課題を改善することができる、という可能性も示唆している。具体的な方法としては、視覚的な補助よりも、演奏形態の理解を促すことに重点を置く、などの鑑賞方法の改善が挙げられる。

以上から、開発した2つのループリックを活用したループリックⅡをループリックⅠの下位構造とすることによって、小学校中学年の音楽学習のうち「図と地の分化」のレディネスを明らかにすることができる。と考える。

本研究では、実演によるパフォーマンス課題の遂行とループリックを用いた評価を試行したが、さらにこの段階のパフォーマンス課題とループリックの開発を進め、音楽学習の諸相を検討していくことを今後の課題としたい。

## 引用文献

- 1) 教育芸術社〔共通事項〕の一覧および関連する学習活動例を基に根津が作成したものである。  
<https://www.kyogei.co.jp/2019.8.31> 閲覧
- 2) 日本教材システム：『小学校学習指導要領新旧比較対照表』教育出版(2017)
- 3) 教育芸術社 題材の系統一覧を基に根津が作成した。<https://www.kyogei.co.jp/2019.8.31> 閲覧
- 4) 同上
- 5) 梅本堯夫(1996)『音楽心理学の研究』ナカニシヤ出版, pp.11-13
- 6) 根津が、梅本(1996)に基づいて作成したものである。
- 7) 吉野巖：「音楽の認知」『音楽心理学入門』誠信書房 第4章 pp.65-72 (2016)
- 8) 横山真理・小島律子：パフォーマンス課題における音楽的思考過程の質的評価, 大阪教育大学紀要第V部門, 第61巻第1号 pp.59-72(2012) / 寺園智美：アメリカの音楽科教育における評価に関する一考察, 広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要XVI pp.149-161 (2004) / 小山英恵：音楽科におけるパフォーマンス評価に関する一考察 - 「真正の評価」論に焦点を当てて -, 学校音楽教育研究第17巻, pp.3-14 (2013) / 薄田茂樹・原田信之：中学校音楽科鑑賞領域におけるパフォーマンス評価の導入, 岐阜大学教育学部教師教育研究9, pp.65-82 (2013) / 薄田茂樹：音楽科に「真正のパフォーマンス評価」を導入した授業改善 - 音楽科におけるループリック開発を通して -, 岐阜大学教育学部教師教育研究10, pp.249-264 (2014)
- 9) 根津知佳子(2018)「情動調律に着目したパフォーマンス評価の意義」『日本女子大学家政学部紀要』第65号 pp.11-18
- 10) 根津知佳子・後藤洋子・川見夕貴：Williams SyndromeのPerformanceに関する研究 - 歌舞伎ダンスの創出を通して -, 日本音楽療法学会東海支部紀要, 第5巻, pp.39-46 (2016)
- 11) 前掲, 根津(2018)
- 12) 尚, 本研究はプロセス全体について「日本女子大学ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会」で審査・承認を得た上で実施した。
- 13) 『Le jouet (ル・ジュエ)』日下瑤子・濱崎理恵・古謝敬子によるアンサンブル
- 14) Albert LeBlanc：The Development of Music Preference in Children Music and Child Development pp.137-157 (1987)  
林庸二：「音楽の嗜好 - 「A. LeBlancによる音楽嗜好の諸変数に関するモデル案 - 」とその音楽療法的意義を中心に」『音楽療法』日本臨床心理研究所 Vol.3 pp.17-23 (1993)